

自然史系博物館等の広域連携による 「瀬戸内海の自然探求」事業について

大阪市立自然史博物館 主任学芸員 波戸岡 清峰

1. はじめに

自然史系博物館はそれぞれの地域において、地元の自然の調査・把握に日々努め、その成果を展示や教育普及活動を通じて市民に還元しています。しかし、一方で、地域の自然を語るには、地元だけでなく周囲の自然に対する理解は不可欠でしょう。その際、博物館及び関連機関が広域的に連携・協働して共通のテーマに基づく調査・資料収集に取り組み、成果を共有し、それぞれの事業に活用していくことは非常に有効な手段だと思われれます。そこで、今回の事業では瀬戸内海を対象地域とし、域内の博物館・水族館・研究機関・研究者が連携して「瀬戸内海の自然探求」をテーマとした市民参加型の観察会や採集・調査、セミナー等を実施し、その成果を巡回型の特別展示やシンポジウム・講演会を開催することによって各地域の住民に公開することにしました。さらに、その結果を、参画した機関及び研究者によって総括し、広域連携の有効性を実証してみようと思います。今回はその事業の概要をお話し、準備段階としての平成24年度の結果を報告します。

2. 事業の概要

1) 事業背景

本事業の活動基盤となる「西日本自然史系博物館ネットワーク」とそのポテンシャル

特定非営利活動法人西日本自然史系博物館ネットワーク（以下、西日本ネット）は、文部科学省の科学系博物館活用ネットワーク推進事業の一環として平成12～13年度に活動した環瀬戸内自然史系博物館ネットワーク（以下、環瀬戸内ネット）を母体とするもので、近畿・中国・四国・九州地方を中心とした多くの館園と学芸員が参加しています（2012年末現在、72組織152名）。大阪市立自然史博物館は西日本ネットの理事長館であり、筆者はその事務局を担当しています。環瀬戸内ネットの時代には、瀬戸内海を巡る7つの館園が連携して、それぞれの地域で観察会などの行事や巡回展示をおこない、地域の自然を紹介、普及し、ホームページ上で生き物分布地図閲覧システムの開発を行い、その成果を“「地域の自然」の情報拠点自然史博物館”（2002）として出版するなど、博物館連携の有用性をアピールしてきました。また、現在の西日本ネットにおいても、西日本を中心とした各館の標本データベースのとりまとめをおこなって国立科学博物館のポータルサイト（S - N e t : サイエ

ミュージアムネット）から広く情報を発信する事業をはじめ、さまざまな研究会や巡回企画を開催しています。また、東日本大震災で被災した標本レスキュー活動にも取り組む中で、参画する館園・学芸員も増え、全国の博物館や研究機関からも支持を得ることができ、ネットワークの有用性や重要性が立証されつつあります。

瀬戸内海域の海産生物相の情報不足とその重要性

ところで、環瀬戸内ネット時代に取り上げた題材は、一部を除いて、陸上の自然に限られ、海域の自然は対象とされませんでした。これは、その分野で学芸員が少なかったことに加え、海域の生物資料の採集は経済的にも大がかりになるからです。しかし、瀬戸内海の自然を語る上で、海域の自然を除外する訳にはいきません。その物理環境についてはWEBサイト（例えば、瀬戸内海環境情報センターなど）で知ることができますが、瀬戸内海の海産生物相全体については稲葉編（1983：増補改訂 瀬戸内海の生物相 I；1988：増補改訂 瀬戸内海の生物相 II）や清水他（1997：瀬戸内海のさかな）の報告があるものの、充分とは言えず、また、更新もされていません。各地域における、自然史博物館を中心とした、自然保護活動や自然教育などを実りあるものにするには、瀬戸内海全体での海産生物についての情報収集とその共有は不可欠です。

2) 事業の内容

大阪市立自然史博物館では、これまで地元の大阪湾を題材にして、博物館学芸員、大阪湾海岸生物研究会（サークル）会員、大阪市立自然史博物館友の会会員が中心となり、水産研究機関や漁業協同組合と協働することによって、海岸はもちろんのこと沖合や海底の生物も含めたさまざまな観察会を行ってきました。来年度（平成25年）には大阪湾の自然をテーマとした特別展も開催の予定であり、現在その準備を行っています。本事業においては、このような経験を活かしつつ、大阪湾から一步踏み出し、瀬戸内海全域を対象とし、域内の各海域において市民参加型の自然体験・調査活動、セミナー等を実施し、博物館相互の連携、さらに研究機関あるいは漁業関係者と広域的な連携事業を実践し、そのノウハウを開発することを計画してみました。

①取り組みにあたっては、まず、以下のような手順によって観察会などを実施する予定です。

- ・海域の分割：瀬戸内海（領海法、瀬戸内海法によるものとは異なる）を、島嶼などによって区切られる大阪湾、播磨灘、備讃瀬戸、燧灘、安芸灘、斎灘、伊予灘、周防灘の8海域にわけ（図1）。



図1 瀬戸内海の分割。

- ・観察会などの開催：それぞれの海域にある拠点施設を中心に、水産業などもからめ、調査、自然観察、セミナーなどを実施するとともに生物に関する情報・資料、標本を集積する。これらを通じて各海域の生物相の特徴を環境、人間の活動との関わりも踏まえつつ浮き彫りにし、それらを総合した形で瀬戸内海の生物的自然の現状をとりまとめる。
- ②次に、成果を各地域の住民に公開するとともに、参画した機関及び研究者によって総括し、広域連携の有効性の検証を試みる。
- ・特別展などの開催：平成27年度に大阪市立自然史博物館においてこの事業の成果に基づく瀬戸内海の自然に関する特別展やシンポジウムを開催する。
 - ・巡回型特別展の開催：展示終了後、展示キットを用いて連携機関などで巡回型特別展を行なう。
- これらの事業では、市民の自然離れ解消への学習意欲を促し、新たな自然探求の意欲を盛り上げるとともに、広く市民や関係者にアンケートやヒヤリングを行うことによって理解度や満足度を問い、連携の有効性の検証を試みるとともに、締めくくりに行われる総括のための資料を作成する予定です。
- そして、最後に、本事業の締めくくりとして西日本ネット主催による評価のための研究会を開催し、広域連携の成果を博物館学的に検証・総括しようと思います。

3) 事業の意義

本事業の実践は、瀬戸内海環境保全特別措置法に基づく瀬戸内海環境保全基本計画に盛り込まれている「浅海域の保全等（藻場及び干潟等の保全等・自然海浜の保全等）」及び「環境教育・環境学習の推進」などの基本施策に呼応し、国家的、広域的な課題解決に貢献するものでもあり、瀬戸内海の海域圏での自然探求の新たなネットワークの構築に貢献するものとなるでしょうし、今回の調査・研究、事業で作成される生物リストは、稲葉編（1983、1988）や清水他（1997）以来、ここ10数年の生物学的知見に基づく新しいものとなり、今後、日本列島の生物相を考察する上で重要な資料を提供することになると考えています。

3. 平成 24 年度（結果）

1) 情報収集

①下関市立しものせき水族館「海響館」

瀬戸内海西部（周防灘）方面での行事が可能。広報、講演会いずれも可能。実際の行事は、山口県漁業協同組合宇部岬支店の協力で行う。

②大分マリンパレス水族館「うみたまご」

瀬戸内海西部（伊予灘）であり外海に面する大分県内の施設として情報収集。日出方面の魚市場などを利用した行事が可能か？ 大分県漁協日出支店の魚市場、及び、佐賀関付近の岩礁で標本収集。

③岩国市立ミクロ生物館

施設そのものは小さいが、近隣に山口県由宇青少年自然の家などの宿泊施設もあり、プランクトンなどの小さな生き物を対象とした観察会が可能。

④玉野市立玉野海洋博物館

備讃瀬戸に面する施設。近くの沖合に干潮時、露出する干潟があり観察会が可能。



図 2 山口県宇部岬漁港。

2) 資料収集

共同利用の可能な広島大学の練習船豊潮丸に乗船し、斎灘周辺の岩礁性の魚類、安芸灘から備讃瀬戸にかけての主に瀬の底棲動物の採集を行うとともに、斎灘から備讃瀬戸にかけての島嶼の写真を撮影した。



図 3 備讃瀬戸。

4. 平成 25 年度（予定）

1) 観察会などの事業

①大阪湾で漁獲される生き物の観察会

泉佐野漁協の協力により、底曳網で観察会当時に漁獲凶海の生き物を用いた漁港での観察会の周辺の博物館施設と連携で実施。漁獲物は標本として収集、一部は同年行われる大阪市立自然史博物館等の特別展で利用。

②播磨灘に流れる河川河口での生き物観察会



図4 泉佐野漁港での行事風景（2007年）。

千種川の河口において、周辺水族館、博物館等と連携して干潟の生き物の観察会を行う。

2) 特別展などの事業

大阪市立自然史博物館を含めた大阪湾周辺の博物館、水族館施設等が連携して、大阪湾の自然に関する特別展、企画展を行う。

5. 最後に

まだ、事業は始まったばかりで、この先どのように展開するか、先行きが不安な点も少なからずありますが、少なくとも、今回の大阪湾周辺施設の連携による特別展は、将来行われる瀬戸内海の自然に関する特別展の例としてのいい例になるのではないかと思います。なお、情報収集等には西日本ネットによる連携が基盤となっていることは間違いありません。

本研究は JSPS 科研費 24240113 の助成を受けたものです。